圖解

量地指南後編

二

ム1
5275
5

門ム1
號 5275
卷 5

戸川藏書

量地指南後篇卷之二

勢南　處士　村井昌弘編述

器用解

磁石功用

大凡磁石を用ゐるの品數種ありといへども。何の時も針頭と子の方ふ安〳〵て方位を定むるハ古今の極法なり

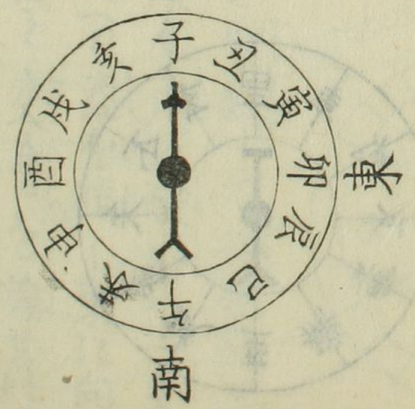
第一ふ見込樣ふ口傳ありて。假令バ子午支を求る時。通俗大体ゐ午の線より。子の線を見込て常なり。其事悪し。左すれば安居分明なるざ法ゐなり。只ふ直上よりして見込むべし。前後脇より見る時ハ。外見ハ中るゞ如しといへども。多分中らざるゐの也眼精散やすき故なり。是を第一の習とし磁石の塵といふて。或ハ振樣ふより。寫の十分ふも中り。又ハ

早稲田大學圖書館
第2.6.4文
藏書

支の九分ゐも中るといふ。是眼目ふ及ぶさる処也。是を塵と云なり。此所ゐてハ小差といへども。彼地ゐてハ里町ふ延る故ふ大差となる理なり。心を用ひ〳〵塵なれ〳〵にすべ〳〵塵を隠すといふ。右ふ述るごとく磁石ふ塵出ゐるといへども。大業のゑれ。此語を捨て可拠をのなし。故ふ止てゝを得ずして必用る也。此器ハ圖形を成ふ至て。分間ゐて少〳〵心を用ゐる也。遠里遠町を小圖ふ寫すば。必分間縮るものなり。茲ふ於て自然ふ塵の隠る理もいなり。

亦順逆の振様といふあり。假令ハ左方右方を一度ふ量るゑれハ進を行ゐれ先の當支をば順ふ用ひ。跡の當支をば逆ふ用るなり。或ハ子を午ふ用ひ。酉を卯ふ用るごとゝれ是なり。是逆なるごとゝといへども。實ハ順路を用る意也。此術業に於て大益いり

又高下の地ふおゐてハ振様別あり。凡て磁石ハ少〳〵も傾く時ハ。鉤先太居物なり。故ふ山坂なごふ於て振ゝれハ規矩元器櫓を用ひて。勾倍を寫して。其通を見込也。磁石とハ少しも傾ごるゝふ安ふ居て振るなり。亦振分といふあり。



図

いふ。小業ゐて度々磁針を振時ハ。微塵なりて顕るふ依て是を厭ひて所ふより振出して塵を一偏ふ聚めざるごとゝふするなり

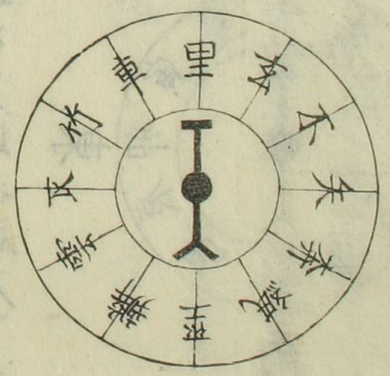
隠銘といふ。磁石の東西南北十二支ふ隠語を以て

記す。是いうる好事の作といつて残るべし。他を愚ふするの作あつて其余益なきを見べし。其東西南北といふを長短軽重の四字に作る。是即子午卯酉也

是ハ易ニ云。木者長。金者短。火者軽。水者重といふ語あるふ基くる。外八支ハ車竹雲辨紙奔不玄の八字に替る其字意を考るふ甚笑ふ堪たる

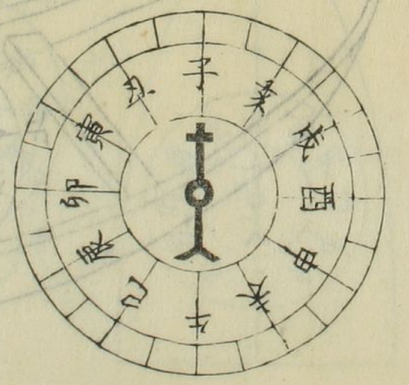
逆磁石といふものなり。逆目磁石共ふ常ふ反して。十二支を左へ配る

逆ふ居るものなり。右の隠銘の條ふ述る所即是なり。今初学隠字の解ることを通暁し安かんとなん為ふ正字を以て記す。此逆支。船路又ハ国圖ふ用ること多し。往々其用所ふ

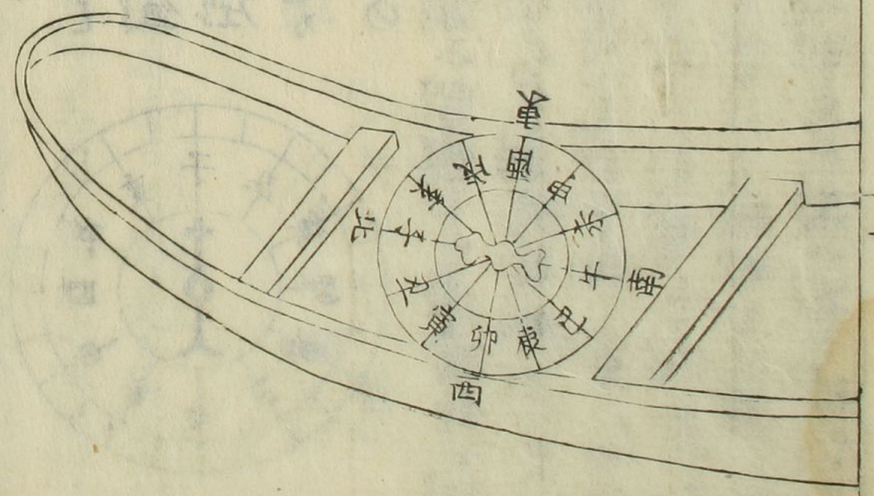


便利の用法を記す

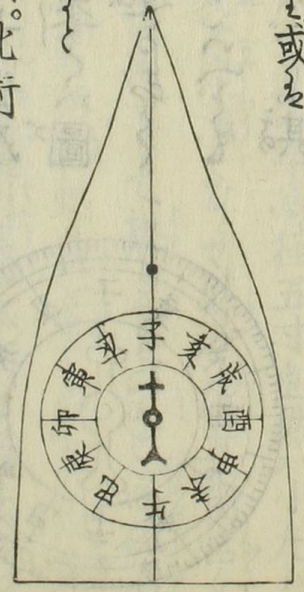
逆磁石といつて左ふ委くく述たる其用船上ふ於て陸地ハ甚益あるふ於ては其制常例ふ反して左方へ十二支を配分し方位を見るべくくに叔方用を用る時ハ何の時も一先子支と磁針と与るふ北方ふ當然して後磁針を欲する方ふ向ハしむ是其用カ也くく南北験時ハ子支ハ南ふ向て磁針ハ午に向ふ又西ふ向て酉を指し東に向ハ卯を指す。磁針と四方配分の十二支と交會を論ずべし磁針の指と以て其欲する処方位と知る力。叔船上の用と云ハ。海中へ船を乗出さんとする時此逆支を紙ふ写し磁針と

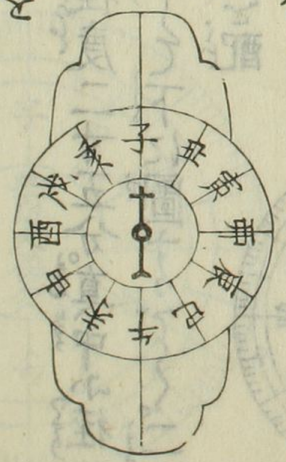


るゝ船を正當の北に向しめん
船中の平直なる所に張付壁ハ
南方趣ん〻欲せは其時に〻ふ〻てる
磁針の鋒の午支に當るヿ一船を
押廻し漕出すなり余是に倣て
知ふるし
忍磁石といふ器あり是ハ密ふ其
直程又ハ其地理を寫し〻んとす
時他人の見顕すゝさを厭ひて忍び
やふ事なるは法なり或ハ此
器を立覧器もいふ小丸を臺に
仕掛て掌の内にて當支を振て



方角を求め或ハ里町を知る或ハ
圖形をあらはす業なり
右用法ゝ〻も忍の術也　古
古傳云凡国郡の形を尽さ
いへども方角同町を求るに此術
を以て成ずしふとも尤當
支を求め知ると本とする間町を
定るとハ歩行をもて相試
むすゝて忍の術ハ能陰藏をもて
專要とする其事我慎むべし又地里の量法時宜ふらん千変
万化の働きなり免角一身規矩の術に満ざるをハ
得がたし尤筆談に尽すべからず傳云云

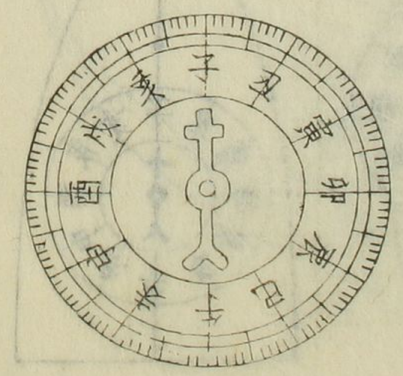




此器ハ胸ふ膺て用ひ。又杖の末ふ載て量る。立覧器と名けるゝハ。立なゞふ覧の意なり。常ふ用ひ馴て益あり。試こと習ふべし

小丸之用

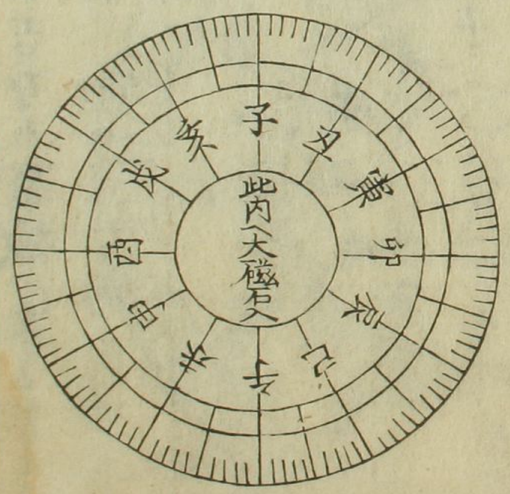
小丸ハ其制真鍮を以て作る。径度二寸五分。真中ふ径一寸程磁針を藏る凹竅を穿つ。而して下に圖するごとく。二段の間用を廻し。内の一段ハ十二支を配当し。外の一段ハ一支毎に十分乃線を刻む。大略此のごとく。委くハ圖と見て辨ふべし。扨右ふ述るおゝ全径二寸五分大略なりといへども先ハ是を以て定法と知るべし。其



故ハ大丸ハ凹径一尺也。中丸ハ大丸の半減。径五寸也。然バ小丸ハ中丸の半減。凹径二寸五分也。是を定法となして然る迄。其用品々有。盤針術元器術ハ全く此器を用ずして拠べきものなし。忍磁石立覧器。隨川器。又ハ一本術等も。其術皆此器を主とす。其用法ハ各元器。大丸中丸。忍磁石。立覧器。隨川器。一本術の用法を以て考へ知べし。煩しくしバ爰ふ載ず

中丸之用

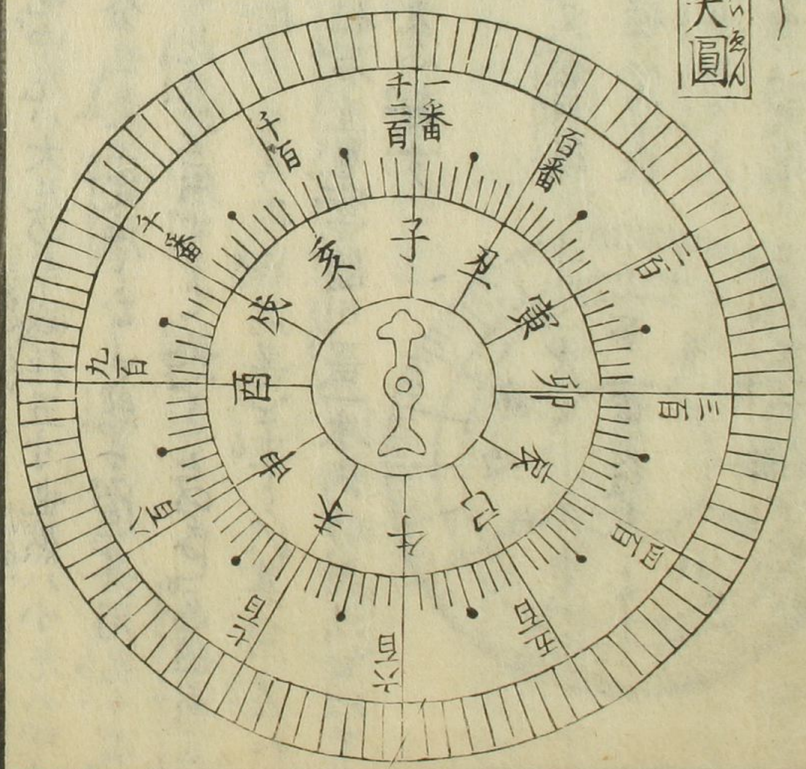
赤銅真中を以て作る。又板目紙などを以て制しもあり。大磁石の下ふ敷て。大丸と均くす。但大業ハ此中丸を小丸の代ふて用ひ。大丸を別ふ径一尺二三寸。四五寸。又



其品ふよう。径二尺ゟも制しくるゞ吉なり。器械ハ大きなるにゝくゝ多しと知るべし

大丸之用並方維大圓

板を以て制す。径一尺厚さ五六分。まき真鍮赤銅を以て制るもよう。或ハ板目紙を以て制る。小丸の下に布て用るもよろしと云り。其制小丸を大ゟ制まる意の器なり。大場を勤るゟ分厘毛速ゟ



見るゟ便あり。依て大国の圖なゞ制するハ必用也。盤中に磁石を居るゝ勿論なり。圖のごゝ三段ゟ圖を廻し内ゟ十二支其次分線。其次ハ厘線なり。元器ゝごゝ針糸ゟ引まき元器の表ゝ。横手ありて。回轉し安ゝやうに。臺を制す。此器を其臺に彫入ること。小丸を元器の上に施すゞおゝと知るべし

又云此大丸を半より折て用る轉法なり。其理径捷なり

隨ふべし。又世ゟ方維太目と云も一物別名なり

大丸の用といふハ。先本場ゝて。大丸の一の方と見込ゟ當て。圖のおゝ。番附をなし。扨二目返ゟ。一を先ゟて見通し。閑の間数番附ゟ記し。扨本目當見返し図のごゝ番附とる也

何時なりとも。其術ハ右の通なり。大丸ハ至極ゟ委し。故ゟ磁

石小塵多き時に用ひて益多〳〵といふ
或傳に曰磁石の塵を論ずる時ハ大丸を以て番附を用ゆ形を
求むべし〳〵但二目返をも一ふ定る也口傳云〻
其用法半径全体両圖を顕す考べし〳〵

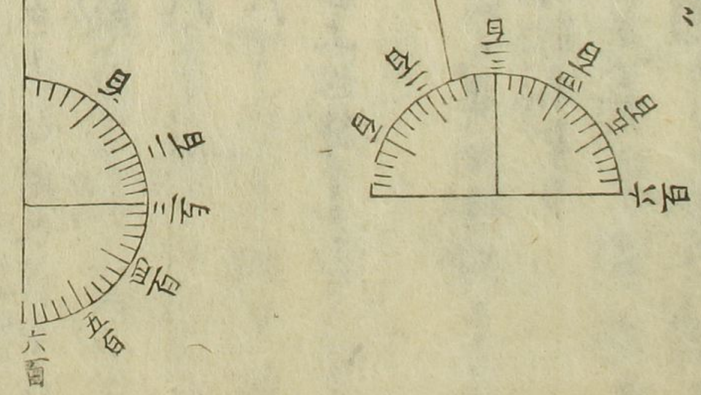
見返二百五十八番

見込一番

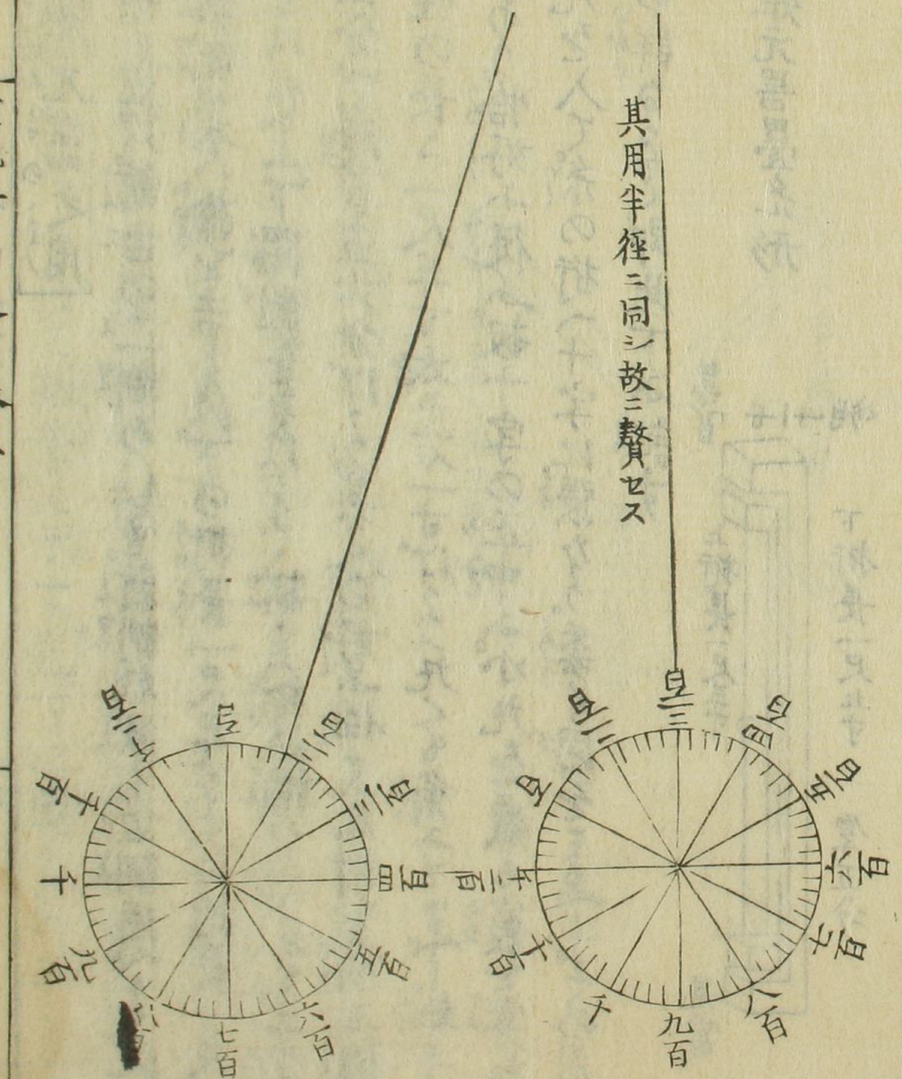
開 三百番
三尺四寸

見返二百五十八番

見込一番



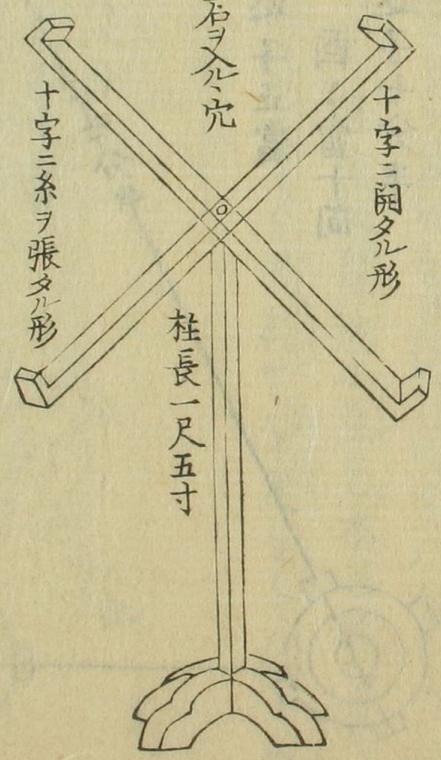
其用半径ニ同シ故ニ贅セス



規矩元器之用

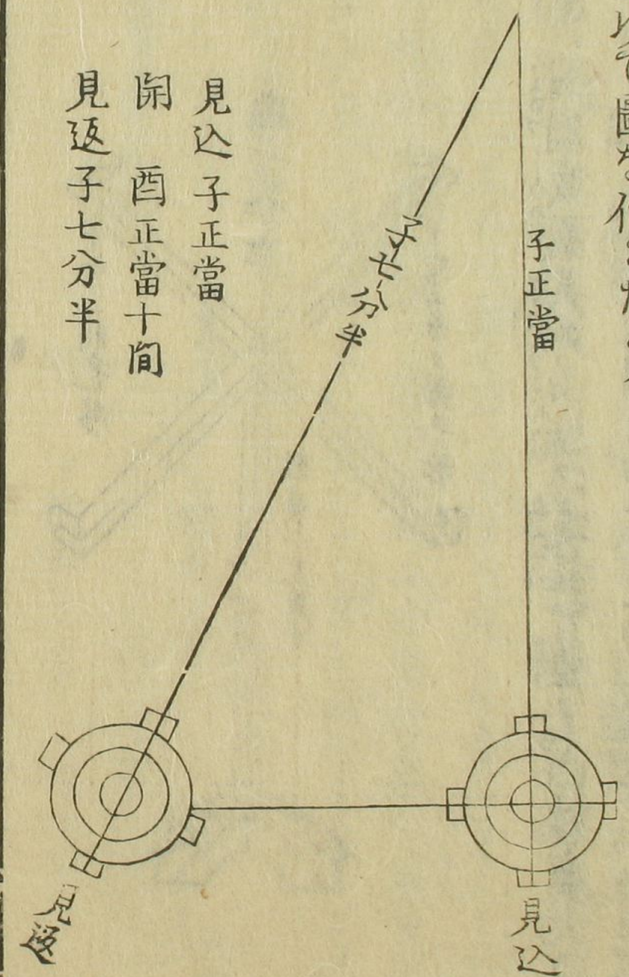
規矩元器ハ新古の二制あり。新制尤宜し。古制用べし。其新制ハ木ハ檜を吉とし。下の桁長一尺五寸上の桁長一尺三寸にして。上下開圖をなすべし。制す。桁の幅ハ上下とも。三寸三四分。厚さ五六分ばかり。其人の好み任す。此桁を載る柱立柱の長さ一尺五寸。太さ方一寸ばかり。凡くも角なるべし。蛸手臺あり。恰好ふ従ふ。扨十字の正中ふ小丸を藏る竅を穿ち小丸を入て。糸の桁へ十字に張なり。委く図をもるべし。その用法の詳なること。即此下ふ記す

規矩元器畧圖



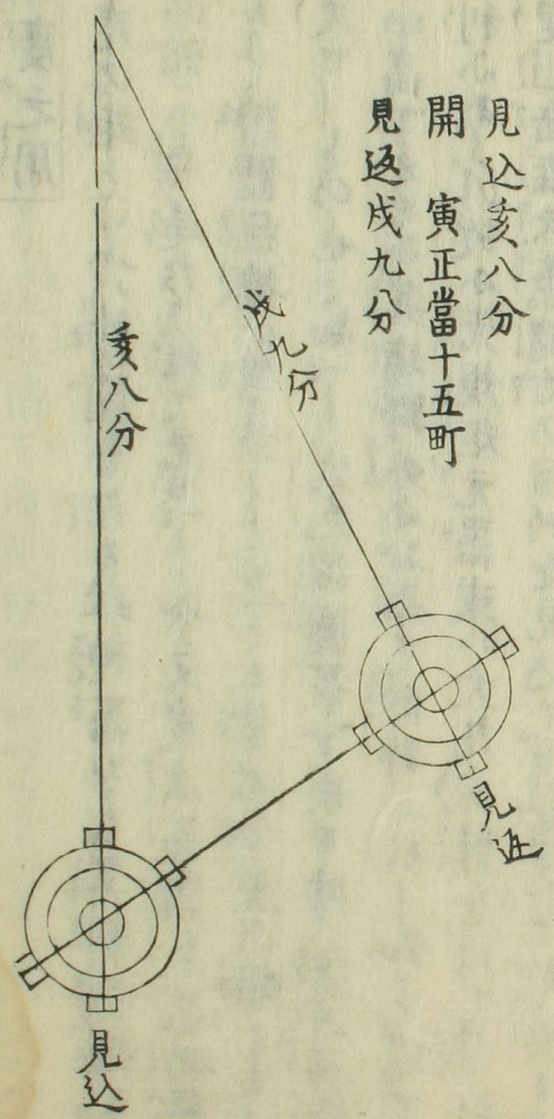
凡此器ハ国圖城圖。其外山海の遠程を量り。山林廣大の境を紀すなど。凡て大業に用る器なり。大丸回盤大丸とハ回盤とハ同器にして別名なり。其理一般なり。其用ハ小丸を十字に上ふ施し。十字に閑圖して糸線を紀し。全く其用をなす。今誠ふ左ふ一二の圖をもて以て初學に示す。先下に圖するがごとく

元器の本場ゟ立て望所と見込て目的子の正面なりゟ左の方横直ゟ酉の正當へ開くゝと十間開場ゟ至り。本目的を見返子七分半へかくのごゝく見終りて後ゟ圖のごゝく。分度の矩を以て圖を作るなり



見込子正當
開　酉正當十間
見返子七分半

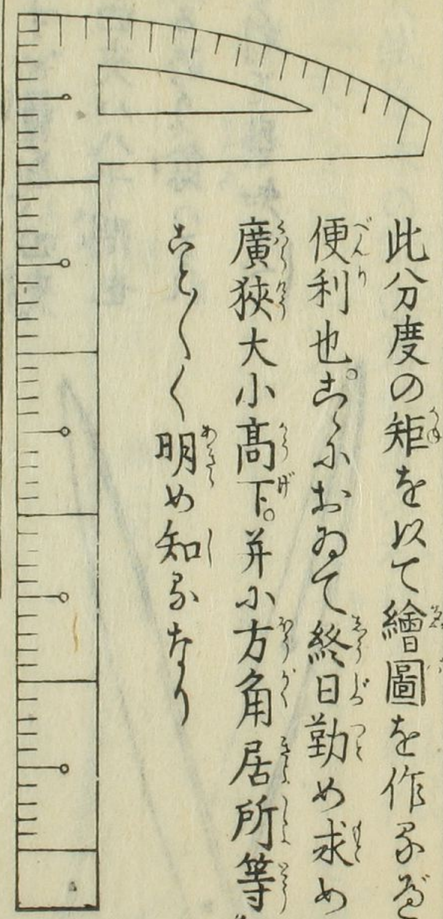
又術曰前術のごゝく。目的を見込むゟ亥八分なり。是よりを開地寅の正當へ十五町。扨開地ゟ至り。本目的を見返すに戌の九分なり。かくのごゝく見終て。分度をもゝく繪圖を作るゝ前術のごゝく



見込亥八分
開　寅正當十五町
見返戌九分

分度之用

分度の矩といふハ。繪圖を作るに神器なり。其制前編器械の部ふ委述たり。往て見るべ〳〵今又虎法器。圖寫器。折紙方など。繪圖徑捷の器多〳〵といへども。皆此分度の矩より工夫せ〳〵もの也と知べ〳〵。大凡国圖等を求る時ハ遠近廣狹大小高下ともふ其場。野外ふおゐて。即時ふ紀〳〵知こと。還て便利ふあ〳〵べ。故ふ先規矩元器或ハ大九四盤を以て原野村里山岳森林等。諸方の目的を見込て。其當支を野帳ふ記〳〵置こと。又開場幾所ふ〳〵ともも其場〳〵に當支と間町とも同く記〳〵置こと。見返の當支をも見込開場のごとく〳〵 野帳ふ記〳〵置こと。扨それよりと段々先々の場ふ〳〵るもの。のごとく終日幾度も求め知て。而〳〵て後ふ其日止宿の所ふおゐて

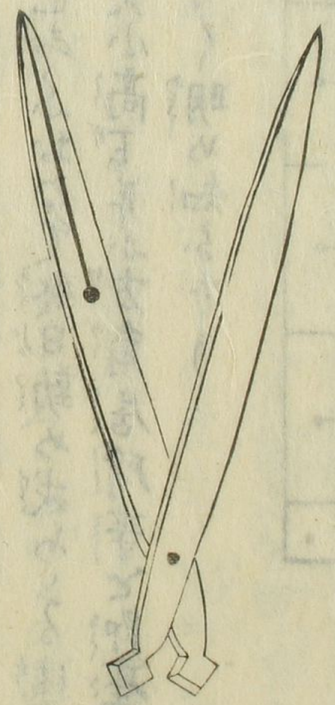


此分度の矩を以て繪圖を作ふ〳〵その理便利也。おゐふおゐて終日勤め求めゐる遠近廣狹大小高下。并ふ方角居所等と即座ふ〳〵〳〵明め知ふなり

渾発之用并頻尺誠定木之用

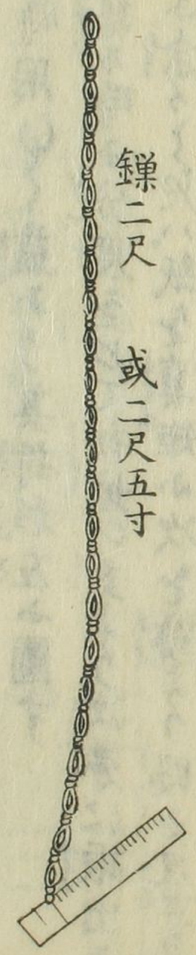
渾発の用といふ此より彼遠程と求めんと欲する時。假令ば。向方ふある。一間の種を夾と見るふ。方尺二尺の先なる渾発の開口二分ばかりで向まで遠程百間なり。又五尺二寸を種として夾と見るふ。方尺二尺の先なる渾発の開口二分ばかりハ。向ふまでの遠程八十間なるなり。遠近高下廣狹淺深同理なり。宜く考よべ〳〵

又向面ふ種となすべし間尺の知るべき物なる時ハ先何やくも目的を定め是を渾発の口ゆく夾を前へなうる。後へなう共或ハ進ム。或ハ退き。其開場ゆく。又以前の種を夾ミて其差口を以て方尺を量て遠程を知ふなる。假令バ初ふ夾ミたる開口二寸五分ゆうて後ふ進て夾ミる開口二寸五分ゆうて。其差口五分を以て。進たる間数二十間あるバ。五分の口を二十間と定め。此口を以て初の口二寸を量ミバ四夾なう。四夾ハ八十間也

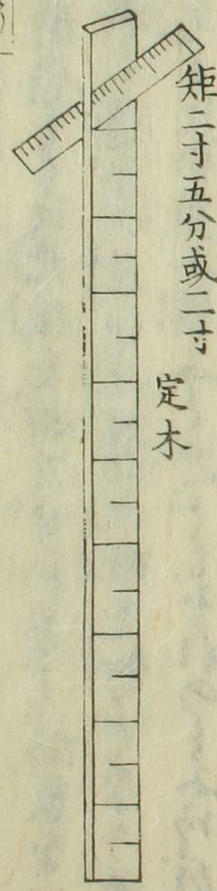


と知るべう。餘ハ是をもて察知すべし

頬尺試定木の制近来好事の者種々の新作をなすといへども一得一失ゆう。拘泥すべからず。今其二品の一ツを圖して勘考ふ備ふ。余ハ準じて知るべし。其用往々ふ記す故ふ茲に贅せず



鏍二尺　或二尺五寸

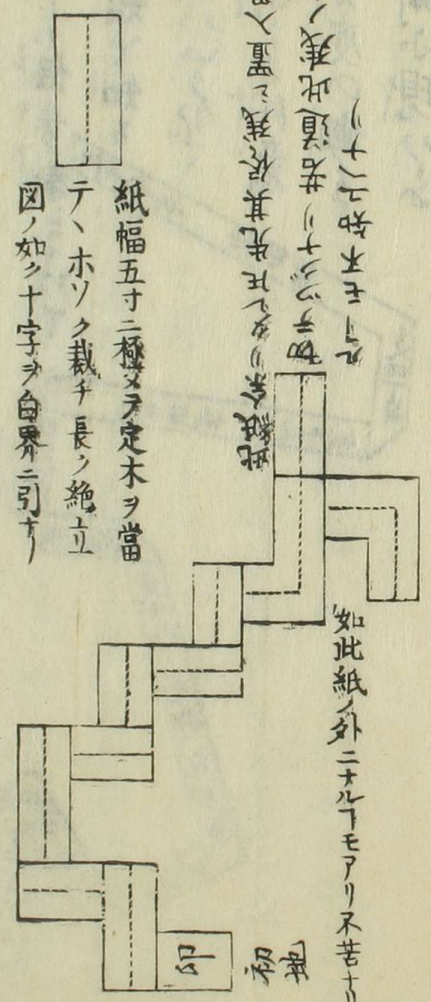


矩二寸五分或二寸　定木

折紙之用

折紙といふ。紙を長く繼立て歩行なう。立覧器を以て方位を定め。是を折て其道程の曲直遠町を知術なう。其用法ハ

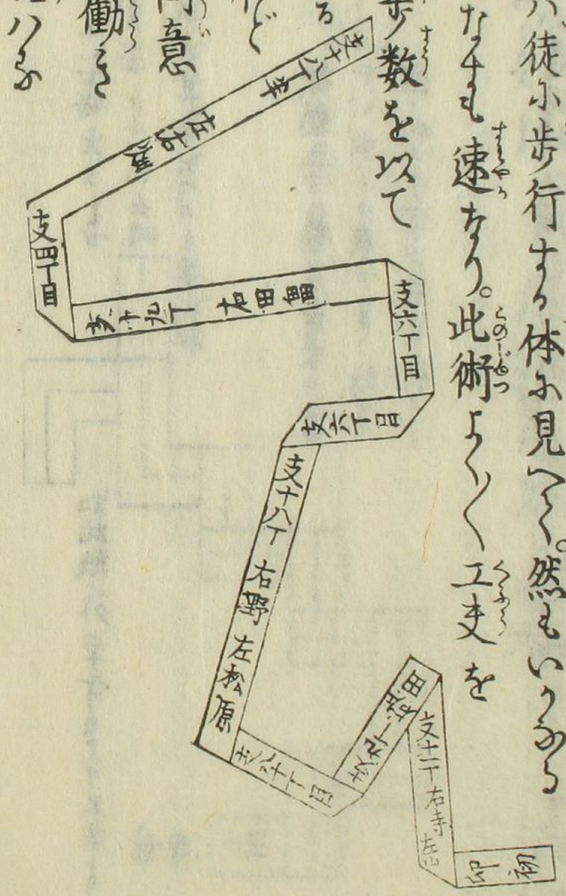
先程村西内等の厚紙を裁て竪の正中に白界を引き我が向ひくる初ふ磁石を以て方位を定め夫より行歩ふ随ひて或ハ左右へ廻転し或ハ斜正に進行すること道路の曲直に應じ其形のごとくに此紙を折て歩行なり路数を以て其町間を識し道路の屈曲地理の大概を知ること なり是他の見聞を忍ぶとの用ふ備ふべきのみならず遠境国圖の時用ひ益あり其折形左ふ圖す



扨図を認る時ふ分度を以て初地の支より次第に振出る曲折を紙ふ余るとハ紙を真矩ふ次を跡より段々畳なりて四方にたるまでふ次てなり然して圖出来する時其大さに紙を継此折紙を其上ふ重て斜なるまでふ針を立其上より篦ふて道筋を引なり

異傳云此術ハ忍の時ふ用ひ出盤元盤等の器物なくして野町の圖を得る術なり其法程村紙西之内紙等の厚き幾幅一寸程ふ裁て三四尺ふ継立懐中して假令バ何方へなりとも圖を仕立んと思ふ場より曲目毎ふ其行路の形ふ截て折て かくのごとく圖すべき地を画きて後ふ右の折紙を草圖の紙上ふ

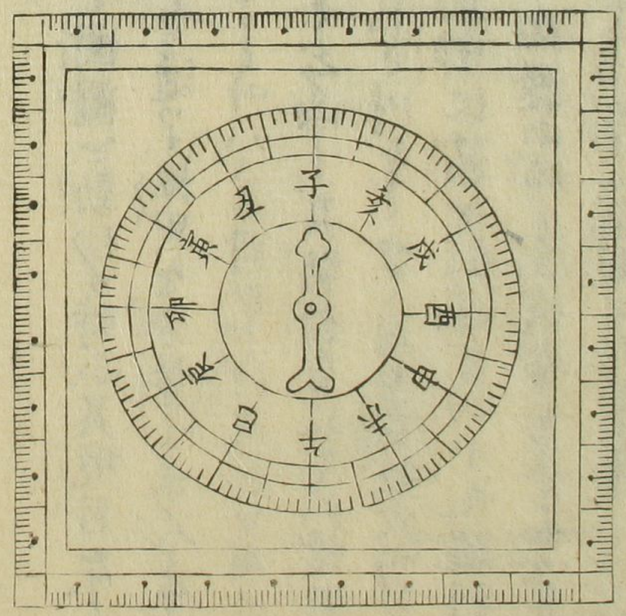
載折目毎の真中と地心と定めて針を以て突て形を寫すべし。方角ハ初の地卯へ向ふ寅へ向ふ其格ふ應じて考べし。間町ハ足数ふて記すべし。二人云合せて一人ハ立覧器を推乃へ忍磁石ともいふ方位を定め一人ハ折紙を勤なべ歩数を記さむ。外面よりハ徒ふ歩行する体ふ見て〳〵然もいうべる大場の圖をなすも速なり。此術ふ〳〵工夫を運すべし。但歩数を以て其長短を知る故ふ紙ハいうべ短く折とも同意なり。分度の働き又此術ふ現ハふ



隨川器之用

隨川器といふハ遠境と量て国圖を勤む時ふ其境目などを大河ありて其河の岸を通て地里を分量し求んとすまば山岳険ふて攀上ること叶ハざる時なれば此器を用ひ船路を量ると同意なりとなるべし。其制板を以て恰好大畧方一尺厚一寸許烈しき川などを用る器故大ふて重さ吉といふ図のごとく正中に筋を引逆支の小丸磁針を彫入れ両方に樋を穿ち此樋ふ均しく線香を入る如くす是ハ両香を見合せて悉なるんと浅知るためなり其此器を用る法ハ先陸ふあるとき平町を勤めてなりとも又ハ間町を量てそなりとも近辺の木ふても岩ふても目ざる物を船路の術ふ湊の種のごとく根発の口ふ合せ置板

船ふなうとも筏ふなうとも乗て右の隨川器と船筏の真中へ居へ扨乗出して目的へ種の渾発の口の合時幾千間過ると知て水上幾町ふ線香幾分炷と香の炷程を定め扨方角と直見して何の幾分へ幾町何の幾分へ幾町と野帳と總むるに若渾発の種とわがさた時ハ捨糸の法を用ゆべきなり船路の度数と元來同時みて方角と付け問町を其方角乃違毎に記すまでの異別なり總じて河ハ屈曲多きもの

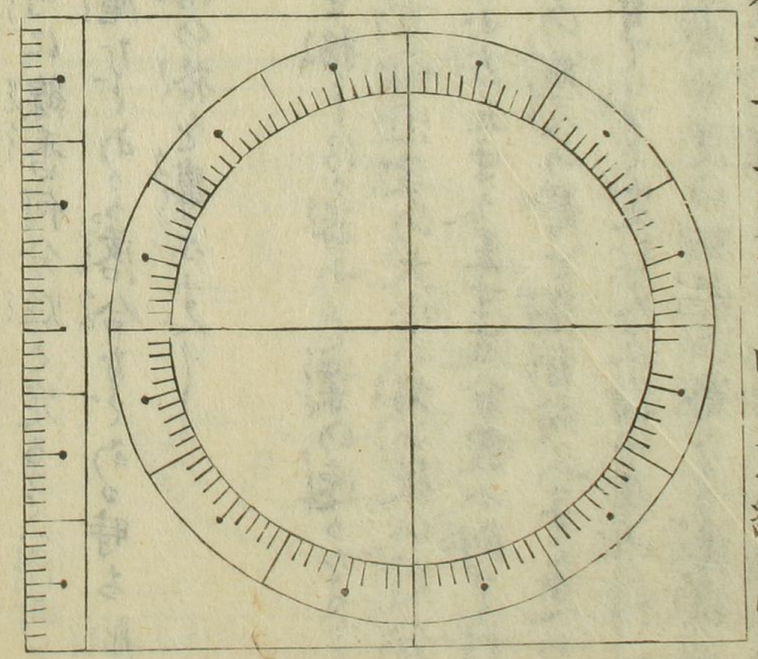


なるゆへなると初水上幾町に線香何分炷と定るとハ間町と短くして量ると可なり滝などあるか落合などある時ハ船足速なり其とたハ用捨の格を專ふすべし

虎法器之用

虎法器といハ分度の理を移したる器ふして業の速なること分度ふ益す其制作ハ云方面四径の大小ハ好ふ從ひ隨分板を選ひ厚さ四分程ふ方五寸ふ五寸五分程ふ削て内の四周と鎬落ふ削て常の曲尺の罫と盛付向ふ子と定め遣ふ故ふ圖のごとく星を付て子と定む又正面の真中横に針を打糸を引糸の辻地心分度の柄針の格なり造様ハ図をなる時紙を虎法器の方面ふ合せて何十枚も切紙毎に十字と折帋毎ふ星を付て向ふ子ふて野帳と以て

假令ハ卯の五分へ十町とみゝハ右の帛一枝を取て虎法器の下に置に向ふ子と合セ子丑寅卯と順支ふ繰り卯の五分ふ針を立虎法器と取直して曲尺の方ゑて十町を量て知ること分度のごゝ。又次の分付へ至る時右の帛尽るとゝハ外の紙を方角と町と合やゝに左向子と外ざるやふ繰合セて又前のごく順支ふ繰て分と合セ取直して町と引分度ゝ

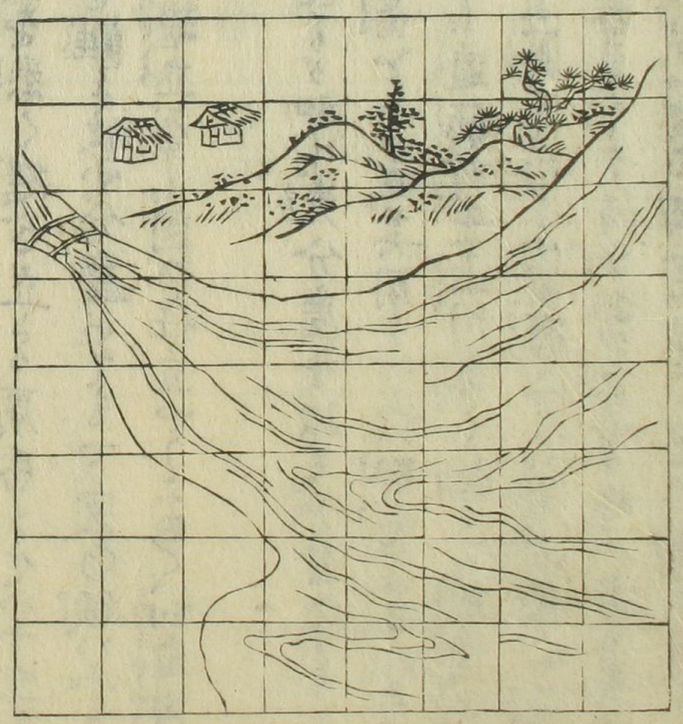


も事速ゝ也。紙を小く切るとゝハ十字細して地心糸过合セゝハ為方り其上下圖を悉く繼ぎ立る廣帛すてハ十字も差こゝわり方角甚合セ難き故ふ分度ゑても下図の紙ハ小き可也紙の盡る度々ふ繼立ぎ。図の仕立ゑゝさるく切者有

圖寫器之用

圖寫器とゝふハ左ふ圖するゞ如し。先分度を以て分付のごく町里と白引して次ふ墨と入る也其用とゝふハ野帳ふらしある圖風景と以て形を圖し。道筋村里山川委く記して。草図成就する時ふ是を清圖ふ寫さゝ山ふ目積ゑてハ分厘間町僅ゝゝり此故ふ圖寫器ゑくゝうたすゑて然る時ハ少も差ふゝゝ。其上假令五寸一里の図を二寸一里の積ゑて紙をちぐむる等速ゝなる

二分ゥ三分四方ゥどゥ削ゥ木を四角ゥさゥ間を一寸づゥゥ五分づゥゥ定めて糸をたゥ草図の上ュ置扱清図紙の上ュ同すの方を置く上ゥいくつめの何処ゥ山峯又川左ゥ幾目ゥ家稿ゥど右の術の目をゥ見ゥて見ゥゥ又清図を推ゥ其拾ゥ段々ゥつゥ術を除きて形色をゥちゅゥ大をゥまちゅゥを大ゥのゥゥこゥ桁目をゥ見て考ゥゥ

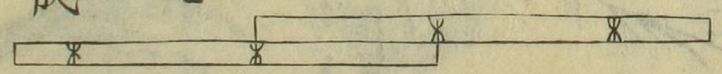


間竿之用

其制桎木ュ方二寸許ュ又ハ二寸五分ュ二寸ゥ制ゥもゥ。尤角ゥ削ュ長さ九尺ゥ定む但三尺づゥの所ゥ胴金を入ゥ此制前編ゥ委ゥ

打様ハ圖のゥゥ半間の所ュ組合ュ通を定めゥゥ竿を打ゥゥ。但二本を用ゥ也或ハ数町を打行とゥゥも曲ゥことなゥ一文字と得ゥゥ然ゥ時ハ平町の地幅を求ゥゥ如ゥ。亦五間ゥも目立ゥゥ坂ゥどゥ打時ハ先高を求ュて是を鈎ゥ用ゥ。扨竪ゥ打て是を絃ゥ用ゥて別傳を以て股を求ゥべゥゥ。即地幅を求め知ゥゥ

又或傳ゥ登竿箱竿ゥいゥゥ。登竿ハ地形不直成所ュて用ゥ。高所ゥ歩行竪竿の継ゥゥ

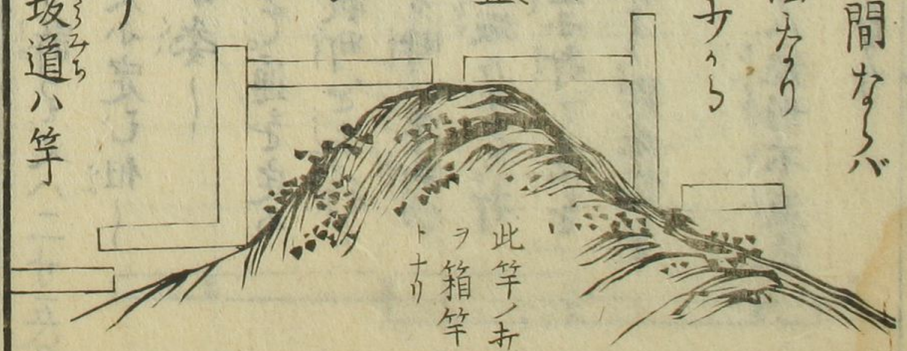


平地ハ繼竿也。棹ハ一間なゝバ七尺。二間なゝバ一丈三尺品ふより棹用ること。規矩の法なり差なれを本とする也。繼竿ハ二本そてサゝらゞ。箱竿ハ品ふより。三本も持るゞ〜方に削こる木棹こるゞ〜。寸尺を盛付ゞ〜。石壇なゞを打こと。登竿箱竿を竪て知るハ三四五〜も量るゞ〜

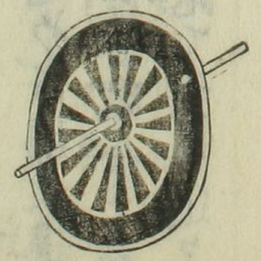
或人云此登竿箱竿ハ竿の制ふあゝゞ打ゆゝのこなり。上ふ所謂と混ずゝゞ

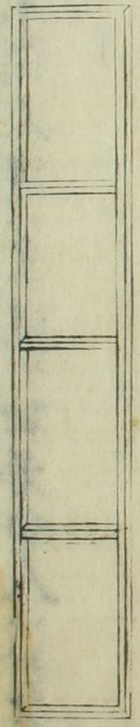
又或傳ふ箱竿とふハ三尺づゝの所そ二本繼合するゞ〜制〜るとゆゝなり

輪竿といふ物なる。是器ハ九折なる山坂道ハ竿



ゆて也縄ゆて也。邪斜ありて。間丈齟齬出來る者也。この輪棹を用るとゝハ少し間尺違ざるなり。其制幅三寸輪六尺也。曲物ゝ。竹輪ゆて也作る。譬ハ其形木綿糸絃繰出す車の如なり。扨梓の木を。心木ふ施〜。左右ゝ二人ゆて轉ずるなり。一周一間と定む。尤輪ふ印をなして。其所ゆて周こゝを一間と知る。山坂道の用なり藁研乃鍔のゞ〜齒を薄くするハ悪〜箱竿といふものなり。此器ハ長一間。横一尺。高三寸。檜乃小割をもつて作る。此竿と二つも三つも設て小口を突合ゆて間を打なる。此箱竿ゆて町見を改る時ハ



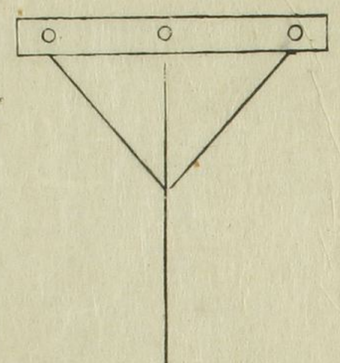


假令不功者といへども。間尺違ひず。況や功者の人ふおゐて
とや所かとう用ゆべし

間縄の用

間縄ハ極上金引の真苧と用ゆ。其例組様前編器械の部ふ
述ぶ。隨分堅く捻て。澁ウ蠟ウ塗て。湿氣の徹ざるごとく、制
すべし。縄の張ハ撓ざるごとくすべし。撓わば間尺違こと
必ずり。尤一間毎に白紙など小結付て。印を眈合すべ
大方ハ一町までわして。其より以上ハ又繼て前の通りに
張るべし

又錐縄といふものハ。左ふ圖を以て。形を平錐のごと
一間の竿の両端と正中ふ。間縄を三筋付て。此三筋の六
尺下わ〳〵。一緒ふ結び合セ。両端の二筋をば。餘りと切て捨



正中の一節を長くして。間縄ふ用ゆ。是を以て正中の其
物ふ押當て縄を引ハ少も斜なく。直になる也。尤両
端の縄何をとても。ゆ〳〵も撓ことあるべ直ざること勿論

量地指南後編卷之二終